

## 初期近代英文学と女性に関するデジタル・ ヒューマニティーズの最新動向と今後の展望

浜名 恵美

本論は、第58回日本シェイクスピア学会のパネル「初期近代英文学と女性」（2019年10月6日）で発表した学術報告の最新化版である。題目からわかるように、本論は論文というより報告・提案書である。シェイクスピアの作品の二つ折版や四つ折版の女性ユーザーたち、イギリス最初の女性職業作家ハナー・ウーリー（Hannah Woolley, 1622-1675頃）を始めとして、英文学の発展には、いまだに正当に解明・評価されていない多数の女性の多様な貢献があった。2019年に発生し2020年から世界的に猛威をふるっている新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミック（以下では「コロナ禍」と略記）への政府や関係機関の遅い対策のおかげで、日本は先進国の中でデジタル化が遅れていることが露呈した。2021年9月にデジタル庁が開設される予定であるが、「Society 5.0」を目指す日本のデジタル化の加速が待望されている。英文学研究分野では、デジタル・ヒューマニティーズ（以下、基本的にDHと略記）の本格的な導入が急務であろう。DHは「初期近代英文学と女性」という課題を探究するために最適のリソースとツールを提供してくれるからである。

### 1 初期近代英文学と女性に関する主要デジタル・アーカイブとデータベース

DH のアプローチを取り入れているか否かに関わらず初期近代英文学と女性に関する研究は盛んに行われているので、最初に、紙媒体の学術誌と本を含めて、注目に値する比較的最近のものを精選してみた(本論 5 参照)。私は、日本の英語文学研究への DH の本格的導入について提案し、DH 関連の参考文献等はすでに紹介しているので、本論では基本的に最小限にとどめた。

初期近代英文学と女性に関するデジタル・アーカイブとデータベースは、個人が作成して公開している小規模のものから大規模なものまで、更新の有無を問わず、オープンアクセスのものから有料のものまで多数ある。その中から以下の五つが特に重要である。

Early English Books Online (EEBO)

Orlando: Women's Writing in the British Isles from the Beginning to the Present ([orlando.cambridge.org](http://orlando.cambridge.org)) (本論 2 参照)

Perdita Manuscripts, Women Writers, 1500-1700 ([amdigital.co.uk](http://amdigital.co.uk))

The Oxford Text Archive (OTA) ([ota.bodleian.ox.ac.uk](http://ota.bodleian.ox.ac.uk))

Women Writers Project ([wwp.northeastern.edu](http://wwp.northeastern.edu)) (本論 3 参照、以下 WWP と略記)

(初期近代) 英文学と女性に関するデジタル・アーカイブの代表は、Orlando と WWP である。どちらも 1980 年代に創始されて、関係者の粘り強い尽力と関係機関の資金提供等により、2020 年代になっても発展を遂げている。この二つは独立したセクションでとりあげるなので、それ以外のものについて簡単に紹介する。

日本でも所蔵している多数の大学図書館がある EEBO は、2020 年 4 月からプラットフォームが、国立情報学研究所と大学図書館コンソーシアムとの共同導入の NII-REO HSS (NII Repository of Electronic journal and Online publications, Humanities & Social

Sciences Collection、人文社会科学系電子コレクション)へ移行した。クリエイティブ・コモンズ (Creative Commons) に入ったので、OTA からでもアクセスできるようになった EEBO-TCP (Text Creation Partnership) の第1期 (Phase I) の約6万冊の TEI/XML テキストもアクセス可能となった。

Perdita は、ウォリック大学とノッティンガム・トレント大学を基盤とするプロジェクトであり、日記から戯曲まで初期近代英国女性によって書かれた原稿のデジタル版複写 (ファクシミリ) を公開している。イギリスと北米の15の図書館とアーカイブが所蔵する約270点の原稿も含まれている (2021年2月現在)。また、同定された作者の伝記的事実や学術論文なども提供している。

OTA は、女性作家や女性を書いた原稿の収集を主眼にしているわけではないが、(あらゆるデータセットに許されているわけではないとしても) 貴重なオープンアクセスのデータベースであり、関連資料やテキストを調査することができる。

なお、最後に「デヴォンシャー手稿アーカイブ (The Devonshire Manuscript Archive, British Library [以下では BL と略記] 所蔵) に触れておく。ヘンリー八世の時代の宮廷人が書いた詩などを当時の宮廷の女性が編集したこと、女性の著作が入っていることでも注目される。英文学界において DH を牽引するカナダのヴィクトリア大学教授レイ・シーメンス (Ray Siemens) が率いるチームが、TEI/XML 化している点でも注目される。デジタル・アーカイブという用語が基本的に使われるが、手稿のデジタル画像の集積だけでなく、検索や分析に適した電子テキストが加わるとデジタル・データベース (またはテキストベース) と言った方がよい場合がある。現在、先進国の国会図書館や大学図書館が推進して

いるのは、テキスト・エンコーディング (text encoding) を含めたデジタル・アーカイビング (digital archiving) である。

## 2 Orlando: Women's Writing in the British Isles from the Beginning to the Present

このオンライン・データベース (テキストベース) は、カナダのアルバータ大学のチーム (Susan Brown、Patricia Clements、Isobel Grundy) がヴァージニア・ウルフの小説の題名を冠した The Orlando Project: Feminist Literary History and Digital Humanities として創始し、コンピュータ・サイエンスを含めた多数の分野の人材の協力と多額の資金を得て発展し、現在はケンブリッジ大学出版局が取り扱っている。2021 年 1 月に「プラットフォームの設計の全面的更新 ('an overall redesign of the platform')」を予定していたのだが、コロナ禍の影響で遅れている (2021 年 2 月 21 日現在、まだ更新されていない)。残念ながら、日本の大学図書館で所蔵している事例がないようだが、個人でも購読契約して使用することができる (1 年間 130 ポンド、2020 年 8 月現在)。ちなみに、コロナ禍に瀕して、2020 年 4 月下旬から 7 月末まで、無料アクセスを実施した。

このデータベースの概要は以下のとおりである。800 名を超える英国女性作家に関する伝記・批評資料を収録。初期中世から現代までを扱う。(ちなみに、初期近代において北米は英国領であったので、例えば、17 世紀にはニューイングランドのクエーカー信徒の女性の宗教的書き物が収録されている)。文学・社会・歴史上の出来事、男性作家、英国人以外の女性作家についての関連資料を含む。著者、職業、ジャンル、場所によるシンプルな検索から、サイトの基礎となる豊富なタグ付けを利用したより強力な検

索オプションまで、拡張的なパスウェイが利用可能である。項目間の何千もの相互リンク参照機能がある。6 ヶ月に一度のペースで定期的に更新され、項目が新たに追加されたり修正されたりするし、現存の作家に関連する情報が追加されることもある。

Orlando は、リレーショナル・データベースとして、かつ連携データベース (linked database) としても優れている。豊富なタグ付けを施すことにより、女性作家の生涯にわたる多種多様な情報が得られる。例えば、ライフ・タグ (life tags) からだけ抜粋しても、出生、出生名、結婚名、仮名、肩書き、階級、人種・民族、宗教、セクシュアリティ、地理的伝統 (geographical heritage)、言語、政治的立場、教育、友人、家族 (関係)、結婚、子供、離婚、健康、恋愛、職業、仕事、暴力、資産、死がある。タグは、この他に、著作 (writing)、著作の創作から出版にいたるもの (production)、テキストの特色 (textual features)、受容 (reception) に関わるものがある。これらのタグの情報が Orlando 内部の別のテキストやタグに関連づけられているし、外部のデータベース (WWP、BL を代表とする図書館、英国人名事典 [*The Dictionary of National Biography*] など) とリンクするか、それらが関連タグとして示されている。

(換言すると、最初からトピック・モデリングをある程度してくれているようなものなので、既存のタグを利活用することもできるし、自分でプロジェクトを組み新しいタグやトピックを追加することもできる。)

三つの事例研究が紹介されている。「マンチェスターと女性文学史」(主に 19 世紀) は、エリザベス・ギヤスケルを代表として多数の項目、人物等が列挙されている。「戦争とその諸影響の文学的表象」は主に 20 世紀。「女性と金銭」は主に 19 世紀末から 20 世紀初頭を扱っている。これらの事例研究を参考にして、初期近代

英文学と女性に関するタグ検索を行って、意義深い成果をあげることが期待される。

デジタル・アーカイブの調査・探求の知的面白さや刷新性は、作家とその時代を超えたつながりの発見であることも強調しておきたい。例えば、主著の長編詩 (*Salve Deus Rex Judaeorum*, 1611 年出版) により、初期近代英文学のフェミニスト詩人として評価が近年ますます高まっているエミリア・ラニエ (Aemilia Lanyer)<sup>1</sup> を調べると、シェイクスピアのソネット集のダーク・レイディのモデル説は現在ではほぼ否定されたものの、職業タグでシェイクスピアが挙げられている。シェイクスピアを調べると 1598 年 12 月 28 日の情報の中で、宮内大臣一座がラニエの愛人であったハンズドン男爵 (Lord Hunsdon) の庇護を受けていたという記述がある。また、影響関係では、初期近代女性作家のアン・ロック (Anne Locke) とペンブルック伯爵夫人メアリー・シドニー・ハーバート (Mary Sidney Herbert) だけでなく、フェミニストの現代作家ミケレーン・ワンダー (Micheline Wandor) の 3 名が挙げられている。ワンダーは、1987 年にナショナル・シアターの主要舞台のひとつであるリトルトン・シアターで作品が上演された最初の女性劇作家であり、その作品はフランスの作家ウージェーヌ・シュエ (Eugène Sue) の小説 (1844 年) を材源とする『さまよえるユダヤ人』である。多数の作品を発表しているが、2007 年 3 月 30 日には、17 世紀のイングランドにおけるユダヤ人に関する 3 番目の長編詩 (*The Music of the Prophets: The Resettlement of the Jews in England, 1655-56*) を出版している。こうして、ユダヤ系イタリア人の血筋であるラニエが、「初期近代英文学と女性」という境界にとらわれず、現代のイギリスを代表するユダヤ系フェミニスト作家とつながるということは意義深い知的な発見であろう。

Orlando は、リレーショナル・データベースと連携データベースとしての機能を強化している。個人やチームでプロジェクトを組み、豊富なタグと膨大なテキスト・データを検索し、最新の方法やツールまで使って分析すれば、多数の発見ができそうである。なお、Orlando のタグや記述内容に関しては、いわゆる科学的・客観的な項目だけでなく、英文学研究には有益でありそうな、「解釈的」、「価値判断的」な項目が意図的に設けられている。コロナ禍のために予定より遅れているプラットフォームの設計の全面的更新では、さらにユーザー・フレンドリーで、直観的なインターフェイスにすることを目指しており、論理的なデータ至上主義の傾向のある科学やビジネス系のデータベースとは一線を画する方針のようであり、公開が待たれる。

### 3 Women Writers Project/Online (WWP/WWO)

WWP は 1986 年にブラウン大学で設立されたプロジェクトで、初期近代から 19 世紀中頃までの女性の著作で現在は入手困難である作品を主眼としてデジタル・テキスト化して公開している。2013 年に、リーダーの異動に伴い、ボストンのノースイースタン大学（デジタル・スカラシップ・グループ）に移り、現在の常勤スタッフは四名（Director: Julia Flanders、Senior XML Programmer/Analyst: Syd Bauman、XML Applications Programmer: Ashley Clark、Assistant Director: Sarah Connell）。この他に多数の研究員とエンコーディングの専門家がいる。デジタル・テキストのコレクション数は 1526 年から 1855 年までの 428 点（2021 年 2 月 21 日現在）。16 世紀 30 点、17 世紀 174 点、18 世紀 123 点、19 世紀 101 点、ジャンルは、ノンフィクション 202 点、韻文 148 点、戯

曲 69 点、フィクション 61 点（ジャンルは重複しているものがあるためか、428 点を超える。）また、毎年 15 点程度が追加されている。（残念ながら、2021 年 2 月現在、コロナ禍のおかげで、校了しているのだが、アップロードして公開することができないテキストが複数ある）。テキストの集積（コーパス）が比較的少数に見えるかもしれないが、上流階級の女性でなくても、中世から商人の妻や娘は計算や読み書きができる場合があったとしても、初期近代イングランドの女性の 9 割以上は読み書きができなかったという事実を忘れてはならない。出版数が急激に増えるのは、マーガレット・キャヴェンディッシュ（Margaret Cavendish）、アフラ・ベーン（Aphra Behn）などが活躍を始める 1660 年以後である。15 巻の『英国女性作家 1350-1850 年 (*Women Writers in English, 1350-1850*)』（オックスフォード大学出版局、1995-1999 年）は、WWP の初期の見事な成果であるが、その後も多数の成果を（電子）出版している。また、複数のスキルに合わせたテキスト・エンコーディングに関するワークショップやセミナーを開催している（2020 年度はすべて中止で、2021 年度は 5 月と 7 月にオンラインで再開予定）。WWP は、個人での購読も可能である（年会費は 50 ドル、学生割引あり）。将来構想の一環として、資金獲得次第だろうが、リンクの充実が考えられている。

WWP が提供している言語分析ツールを駆使した、女性と男性の研究員による二つの事例研究（‘How Science is Reflected in the WWO Corpus’ と ‘Rakes, Fops, Libertine, Coquets: Gendered Pejoratives Within WWO’）が紹介されている。前者は、男性の学者や作家中心の科学史では無視されてきたが、初期近代を含めた過去の女性作家たちが天文学や数学に関心を寄せていたことを明らかにしている。後者は、放蕩者の黄金時代はチャールズ二世の宮廷と共に



消滅したとしても、‘rake’、‘fop’、‘libertine’、‘coquet’という語や概念が女性作家の作品に影響をとどめていることを解明している。

最新の研究成果の一つとして、シドニー家に関するもの (Amanda Henrichs の ‘Allusions in the Age of the Digital: Four Ways of Looking at a Corpus’、2019) を紹介しておく。これは一族の四名 (ペンブルック伯爵夫人メアリー・シドニー・ハーバート、メアリー・(シドニー・) ロース [Lady Mary Wroth]、ロバート・シドニー [Robert Sidney]、フィリップ・シドニー [Philip Sidney]) の作品群 (男性作家のテキストは外部から入手) の間テキスト性に関する考察であるが、最大の目的は、メアリー・シドニー・ハーバートとメアリー・ロースが、親交のあった叔母と姪であったにもかかわらず、二人の作品に間テキスト性がないように見えるという不可解なギャップを解明することであった。遠読 (distant reading) には、3つの普及しているコンピュータ・ツールを使用した。コーパス分析ソフト AntConc (早稲田大学のローレンス・アントニー教授が開発し無料配布している世界的に有名なソフト)、階層クラスター分析、二つの異なる確率法として潜在意味解析 (latent semantic analysis) と潜在ディリクレ配分法 (latent Dirichlet allocation) である。これらのツールを駆使して膨大なコーパスを分析したところ、メアリー・シドニー・ハーバートとメアリー・ロースの作品のつながりを見つけることはできなかったのだが、いくつかの意義深い分析結果が出た。最も重要な結果は、メアリー・ロースのロマンス『ユレーニア (Urania)』(1621年)は、叔父フィリップ・シドニーの作品 (であり妹のメアリーが編集に関わったとされる)『アルカディア (Arcadia)』(1590年)の影響を受けていることが英文学史では当然視されてきたが、潜在意味解析で、単語レベルでは両者が似ていないことが示されたことである。つ

まり、『ユレーニア』は『アルカディア』の影響を受けていない可能性があることになる。

Henrichs は、実は、質的データである文字テキストを量的分析手法によって分析する、質的研究と量的研究の両方の特徴をもった混合研究方法として知られるテキスト・マイニングを行っている。しかし、彼女は、結論で、伝統的な文学研究者からの DH 的アプローチへの批判を予想し、抗弁している(23)。

伝統的な文学研究者の DH 的アプローチへの強い反対論は、コンピュータ分析の ‘a bag of words model’ は文学を語彙に還元するが、「文学の定義そのものが、文学テキストをその部分の総和以上のものにする意識や特徴の何らかの余剰の層を追加したものである」というものである。この批判に対して彼女は、次のように反論している。コンピュータのプログラムは人間の作者 (human authors) によって開発され、書かれ、拡張されたものであり、これらのツールが表示するテキストに関する想定は、作者がテキストとは何であると考えているのかを示している。この想定が問題にされないことがあまりにも多いが、私たちの学問的方法の認識論的な基盤に注意を払えば、私たちが＜何を＞知っているかについてだけでなく、＜どのように＞知っているかと思っっているのかが明らかになる。テキスト分析ツールの作者が、単語を（コンピュータの言語分析の観点からは）効果的に文脈のない記号と考えているとわかっていても、こうしたツールがより文学的なテキストに使われる資格がないわけではない。重要であるのは、私たちが「理解する（‘making sense’）」ためにツールをどのように使うかを知ることなのだ。デジタル時代の文学研究における認識的枠組みの変革が求められていると言えるだろう。

WWP のようなデジタル・テクノロジーを駆使したプロジェクトは、間テキスト性を始めとする文学概念の見直しを迫る。遠読と精読、コンピュータと人間という二項対立自体が疑問に付されているのだが、初期近代英文学の女性たちの著作を遠読することも精読することも、新しい相互作用をすることもできる。WWP は今後も着実に貴重なテキストを収集してデジタル化して公開し、研究者たちに DH 的アプローチを駆使した成果をあげる機会を持続的に提供することが望まれる。

#### 4 初期近代英文学と女性の研究：DH の成果と課題

本論で最初から論じるか暗示してきたことをまとめると、以下の三点となる。

- 1) デジタル・アーカイビング、テキスト・マイニング、データの視覚化などを行なえる DH は、初期近代英文学と女性の研究にとって最適の味方である。
- 2) 女性を書いた多種多様な文献のなお一層の発見、調査、考察が待望される。
- 3) 伝統的な「英文学」やジャンルの概念の再定義が要請される。

初期近代英文学と女性の研究には DH が非常に向いている。この分野の作品は、購入者が少数であるために出版することが難しい。しかし、女性の識字率のまだ低い時代に書かれた貴重な資料や作品をデジタル・アーカイブに保存・公開し、研究することができる。さらに、手稿の画像だけでなく、TEI/XML でコード化・テ

クストファイル化して公開してくれれば、検索や分析等を行うことがより容易になる。

当時の女性たちで何らかの教育を受けることができた恵まれた者や生きるために読み書きをおぼえた者が作品(a piece of writing)を残している。例えば、商人の場合、夫が夭逝したために、妻が商売をひきついで、とりしきり、商売に関する書き物を残しているように、これらの作品は多種多様である。詩、戯曲、小説、物語、ロマンス、紀行文、忘備録 (commonplace books)、会計簿、料理本、礼儀作法書、祈祷、スピーチ、手紙、日記、ノート、翻訳、雑録、懺悔、法廷書類、助言、暦、自伝、聖書・書道・医学・宗教に関する著作、瞑想、賛美歌、領収書、説教のメモ、論文。

フェミニズム批評は、多数の女性作家や彼女たちの著作を掘り起こし、伝統的な男性中心的な英文学史の正典 (キャンノン) の書き直しを要求した。DH はこの大義を後押しする。Orlando、WWP などのデジタル・アーカイブ (データベース) のテキスト群は、従来の「英文学」の再定義を要請しているのである。従来の英文学のジャンル概念には収まらない多種多様な著作の存在が明らかにされている。21 世紀の英文学のジャンルにグラフィック・ノベル (graphic novel)、つまり「マンガ」が加わったように、初期近代英文学には、例えば、従来よりも多様な作品を含むノンフィクションのジャンルをよりしっかりと確立して、歴史学等の他分野の研究者とも共同して研究することが望まれる。

次に、初期近代英文学と女性に関する DH を導入した研究の課題と展望を論じる。課題は、DH の知識とスキルの習得、習得するための機会の提供、センター等の構築である。特に院生と若手の研究者に DH の知識とスキルを習得するための機会 (講座、ワークショップ、実践的トレーニング)を与える必要があるし、DH の

方法論やツールを駆使した刷新的研究を推進する必要がある。(前途多難であるが、指導教員も相応の知識とスキルの習得が喫緊の課題であろう。) コンピュータ・サイエンティスト、プログラマーなどの支援・協力を得て、DH を本格的に導入する必要がある。日本の人文社会系では東京大学大学院を代表とする一部の大学院が DH を科目として開講しているが、今後は少なくとも主要大学では DH 研究を支援するセンターがあることが望まれる。

BL やフォルジャー・シェイクスピア図書館 (Folger Shakespeare Library) のように無料で電子データベースやコレクションにアクセスさせてくれる図書館がないわけではないし、多様な機能付きの電子データベース (有料) では、チュートリアル、セミナー、分析ツールなどまで提供して、ユーザーのリテラシーやスキルを高めるサービスを提供している。しかし、現実には、多数のユーザーが、概してデータベースを使いこなせていない。あえて繰り返せば、特に大学院では DH の基礎を習得する機会を与える必要があるだろうし、学会としてもワークショップや実践的トレーニングを提供して、少数であっても若い研究者を支援する態勢を整える必要があるだろう。もちろん、中高年も奮起することが求められるだろう。

一つのプログラミング言語の習得に 300-500 時間<sup>2</sup> かかると言われているので、パイソン (Python)、アール (R) などの習得にも相当の時間がかかるし、データ・サイエンスのリテラシーも高める必要があり、習得するのは非常に大変である。さらに、私たちが扱うのはスペリングも確立していない初期近代英語であり、分析データをそろえる (cleaning, tidying) だけでも容易ではない。しかし、先行研究がないわけではないし、デジタル時代の新しい研究を創造するためには、挑戦するに値することだろう。

院生の DH 学習の機会として、北米では（日本でも DH の関係者から）、カナダのヴィクトリア大学が開催している定評のある DH Summer Institute（DHSI）に、奨学金を得て参加することが勧められるようだ。しかし、コロナ禍のおかげで 2020 年度は中止になってしまったが、DHSI は例年 6 月（2021 年度は 7 月）に 2 週間程度にわたって開催されるので、まだ学期中である日本の学生が参加することは難しい。私は、2020 年度はクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービスのズーム（Zoom）とグラフィックソフトウェアのキャンバス（Canvas）を使って 7 月 13 日（月）－15 日（水）にオンライン開催となったオックスフォード大学の DH のサマースクール（DHOx2020）に参加してみたが、世界中から院生を中心とする約 250 人の参加者が集まり、盛況であり、若い人々の学習意欲、またプログラミング言語を学習する機会がなくて困っていることがよくわかった（「Python をどうやって学べばいいのか？」という類の書き込みをチャットにする学生が何人もいた）。2021 年 7 月にシンガポールで開催（5 年毎に開催）予定の第 11 回世界シェイクスピア会議（コロナ禍のためにオンライン会議となった）のプログラムに入っている五つのワークショップ中の二つが DH（‘Digital Humanities and Shakespeare Adaptations’ と ‘Short Circuits: New Digital Pedagogies’）に関係していることも、今日の若手のシェイクスピア研究者が求めていることを明示している。

今後の展望としては、DH 的アプローチの発展と革新的英文学研究・教育の創出が求められる。次世代の英文学研究者には、女性やマイノリティに焦点をあわせ、21 世紀を生きる人々の関心をひきつける英文学の研究と教育を構想することが望まれる。テキスト・データ、画像データを含めて、DH 的手法で分析し視覚化し

て革新的な成果をあげることが期待されている。さらに、デジタル・アーカイブやコレクションの閲覧とダウンロードをするにとどまらず、データベースの構築・提供者側の期待に応える活躍をすることも望まれる。Orlando、WWP、その他のデータベースの創設者たちが望んでいることは、データベースを研究に使う成果をあげるだけでなく、データベース自体の改善への提案や要望でもあることを付言しておこう。

## 5 精選書誌目録

- Achieve, Patricia and Bernadette Andrea, eds., *Travel and Travail: Early Modern Women, English Drama, and the Wider World* (Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press, 2019)
- Beal, Peter and Margaret J.M. Ezell, *Writings by Early Modern Women*. English Manuscripts Studies 9 (London: British Library, 2000)
- Bennett, Lyn, *Rhetoric, Medicine, and the Woman Writer, 1600-1700* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018)
- Booth, Alison, Sarah Connell, Marie-Louise Coolahan, Jeremy Boggs, Julia Flanders, David Kelly, Rennie Mapp, and Worthy Martin, 'Only Connect!: Intertextuality, Circulation, and Networks in Digital Resources for Women's Writing' <[dh2017.adho.org/abstracts/255/255.pdf](http://dh2017.adho.org/abstracts/255/255.pdf)> [accessed 14 August 2020]
- Brown, Susan, Patricia Clements, Isobel Grundy, Sharon Balazs and Jeffrey Antoniuk. 'The Story of the Orlando Project: Personal Reflections', *Tulsa Studies in Women's Literature*, 26, 1 (Spring 2007), 135-143.

- Burkert, Mattie, 'Plotting the "Female Wits" Controversy: Gender, Genre, and Printed Plays, 1670-1699', *New Technologies in Medieval and Renaissance Studies*, 6 (2016), 35-59  
<[digitalcommons.usu.edu/english\\_facpub/794](https://digitalcommons.usu.edu/english_facpub/794)> [accessed 14 August 2020]
- Carillo, Ellen C., *MLA Guide to Digital Literary* (New York: MLA, 2019)
- Cohen, Elizabeth S. and Margaret Reeves, eds., *The Youth of Early Modern Women* (Amsterdam: Amsterdam University Press, 2018)
- Connell, Sarah, Julia Flanders, Nicole Infanta, Elizabeth Polcha, and William Reed Quinn, 'Learning from the Past: The Women Writers Project and Thirty Years of Humanities Text Encoding', *Magnificat Cultura i Literatura Medievals*, 4 (2017), 1-19.
- Crawford, Julie, *Mediatatrix: Women, Politics and Literary Production in Early Modern England* (Oxford: Oxford University Press, 2014)
- Egan, Gabriel, ed., 'Special Section on Computational Methods for Literary-Historical Textual Scholarship', *DSH: Digital Scholarship in the Humanities*, 34, 4 (December 2019), 818-937.
- Estill, Laura, Diane K. Jakacki, and Michael Ulliot, eds., *Early Modern Studies After the Digital Turn* (Tempe, Arizona: ACMRS Press, 2016)
- Gold, Matthew K. and Lauren F. Klein, eds., *Debates in the Digital Humanities 2019* (Minneapolis, Minnesota: University of Minnesota Press, 2019)
- Hackett, Helen, *Women and Romance Fiction in the English Renaissance* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000)
- 浜名恵美, 「デジタル・ヒューマニティーズの本格的導入の提案—日本の英語文学研究の resilience のために」, 特別寄稿論



- 文, 『英文研究』, 日本英文学会支部統合号, XI (2019), 1-10 (95-104).
- Henrichs, Amanda, 'Allusions in the Age of the Digital: Four Ways of Looking at a Corpus', Online publication, 2019 <[dx.doi.org/10.17613/pqwq-2g78](https://doi.org/10.17613/pqwq-2g78)> [accessed 14 August 2020]
- Hubbard, Eleanor, 'Reading, Writing, and Initialing: Female Literacy in Early Modern London', *Journal of British Studies*, 54, 3 (July 2015), 553-577.
- Justice, George L. and Nathan Tinker, eds., *Women's Writing and the Circulation of Ideas: Manuscript Publication in England, 1550-1800* (Cambridge: Cambridge University Press, 2002)
- 北村紗衣, 『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち 近世の観劇と読書』 (東京: 白水社、2018)
- Korda, Natash, *Labors Lost: Women's Work and the Early Modern English Stage* (Philadelphia, Pennsylvania: University of Pennsylvania Press, 2011)
- Loomba, Ania and Melissa E. Sanchez, eds., *Rethinking Feminism in Early Modern Studies: Gender, Race, and Sexuality* (London: Routledge, 2016)
- Modern Language Association. *PMLA: Publications of Modern Language Association*, 135, 1 (January 2020). Special Topic: Varieties of Digital Humanities Coordinated by Alison Booth and Miriam Posner
- 村田祐菜, イベントレポート「京都大学文学研究科・文学部公開シンポジウム「デジタル人文学の世界へ」」, 『人文情報学月報』, 114, 2 (2021年1月)
- Ozment, Kate. 'Review: "She Wrote It, But...": Erasures, Recoveries,

and the Future of Women's Book History', November 2016 Symposium, Texas A & M', Early Modern Online Bibliography, Archive for the 'Digital Humanities' Category <earlymodernonlinebib.wordpress.com/category/digital-humanities/> [accessed 14 August 2020]

Pender, Patricia, ed., *Early Modern Women's Writing and the Rhetoric of Modesty* (London: Palgrave, 2012)

Phillippy, Patricia, ed., *A History of Early Modern Women's Writing* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018)

Randal, Martin, *Women, Murder, and Equity in Early Modern England* (London: Routledge, 2008)

Renen, Denys Van, *The Other Exchange: Women, Servants and the Urban Underclass in Early Modern English Literature* (Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press, 2017)

Roberts, Sasha, 'Women's Literary Capital in Early Modern England: Formal Composition and Rhetorical Display in Manuscript and Print', *Women's Writing*, 14 (2007), 246-69.

Ross, Sarah C. E. and Paul Salzman, eds., *Editing Early Modern Women* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016)

Scarsi, Selene, *Translating Women in Early Modern England: Gender in the Elizabethan Versions of Boiardo, Ariosto and Tasso* (Oxford: Oxford University Press, 2011)

Sherman, William H., *Used Books: Making Readers in Renaissance England* (Philadelphia, Pennsylvania: University of Pennsylvania Press, 2008)

Thompson, Ann, 'Women/ "women" and the Stage', in Helen Wilcox (ed), *Women and Literature in Britain, 1500-1700* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp.100-16.

Thompson, Ann and Sasha Roberts, eds., *Women Reading Shakespeare 1600-1900: An Anthology of Criticism* (Manchester: Manchester University Press, 1997)

Wernimont, Jacqueline and Julia Flanders, 'Feminism in the Age of Digital Archives: The Women Writers Project', *Tulsa Studies in Women's Literature*, 29, 2 (Fall 2010), 425-435.

#### 注

<sup>1</sup>彼女の人生を描いた芝居 *Emilia* (Morgan Lloyd Malcolm 作) が、2018 年 8 月 10 日から 9 月 1 日までロンドンのグローブ座において、シェイクスピア役を含めて全員女優で初演された。その後、ウェストエンドで 2019 年 3 月 8 日から 6 月 1 日まで上演され、2020 年度ローレンス・オリヴィエ賞の最優秀作品賞 (Best Entertainment or Comedy Play) を受賞した。2020 年 11 月 10 日から 12 月 2 日までこのウェストエンド版がコロナ禍により深刻な危機に瀕している演劇産業を支援するためにオンライン公開 (録画ストリーミング) された。当時の女性としては長生きをした (1569-1645) 彼女の年齢にあわせて、3 名のアフリカ系等の女優がエミリアを演じた。シェイクスピアとは異なり「忘れられた」エミリア・ラニエの唯一の長編詩 (舞台上でエミリア役の女優が大事に抱えている書物) は、この劇の中では、男性優位社会を糾弾する主張をそのまま書けば検閲を通らないので、まず検閲を通りやすくするために敬虔な題名をつけ、さらに多数の上流階級の女性たちが前書きを書いて支援したとされている。(こうした措置を講じてから、自分の長編詩の中でエミリアは、実は、聖書の中で女性のイヴだけが原罪を犯したとされていることに抗議して、アダムとイヴは同罪であると述べ、男女の平等性を示唆して

いる。) 私は 2018 年のグローブ座版 (ライブ) とウェストエンド版 (2020 年オンライン版) の両方を見たのだが、両方の上演で 4 世紀にわたる女たちの怒りを爆発させるエミリアの台詞には凄まじい迫力があつた。

<sup>2</sup> コンピュータのプログラミング言語の習得にかかる時間に関しては、学習者のいわゆる理系・文系という傾向の違いから、対象言語の難易度、経験の有無を含めて、多様である。ひとつのプログラミング言語を覚えるためには 1 週間もあればよいが、それを使いこなして所期の成果を出せるようになるには 1000~2000 時間かかると述べている (文系の独学) YouTuber もいる。私の個人的経験では、この説には説得力がある。なお、2020 年度から日本の小学校でプログラミング教育が必修化されたので、将来の世代の活躍に期待したい。